

[史料]

アウクスブルク市の支配を夢みた人物、 ペーター・エゲン (1413 - 51 年) について (1)

「ブルッカルト・チンクの年代記 (1368 - 1468 年)」より

山 本 健

On Peter Egen, Who Failed in
Ruling the City of Augsburg (1413-51) (1)

— *Chronik des Burkard Zink, 1368-1468* —

Takeshi YAMAMOTO

This paper rests on the premise that Augsburg City had a special immigrant policy in the Later Middle Ages. In the fourteenth century the city council granted a special citizenship status, termed *Paktbürgertum*, to some rich foreigners who might want to get more profits in order to bolster the city finances. The term *Paktbürgertum* means a kind of privilege for a foreigner to pay a fixed, smaller tax amount than the normal citizens of Augsburg.

Some rich Augsburg citizens who might profit from this *Paktbürgertum* came forward in those days. For instance, in the mid-fifteenth century Peter Egen of Augsburg, grateful that the Emperor Frederick III had allowed him to change his name to von Argon (an aristocratic name which gave him high status), compelled the city council to grant him the special citizenship status of *Paktbürgertum*. Augsburg granted him the status with some reluctance because of guildmasters who wanted to support Peter von Argon.

In the meantime, he had a quarrel with the *Langenmantel*

family about their children's secret marriage without Peter's permission. The Langenmantel family dishonored Peter and his family name in a court of justice by speaking ill of him. So Peter proclaimed his innocence to the city council. But the city council did not believe him. Therefore, Peter declared to abandon his citizenship again. But other citizens were not disturbed by his declaration this time. They preferred to criticize him rather than support him. The reason is that Peter accused the mayor and the senior members of the city council of committing a great injustice.

Hence, Peter was isolated and was exiled from Augsburg. He became a member of the St. Georg knighthood and returned to Augsburg, and sued the city for an apologetic reply to him. The lawsuit went on for eight years. But during that time, Peter was assassinated in Vienna. This incident gave him nothing except death.

This story conveys to us something about the spirits of medieval citizens in the city of Augsburg.

アウクスブルク市の支配を夢みた人物、 ペーター・エゲン（1413－51年）について

目次

I はじめに——ペーター・エゲン事件について

(1) その意義について——パクトビルガートゥーム

(Paktbürgertum) との係わりで

(2) 史料から見えるチンクとペーター・エゲンの関係

II テキストの邦訳

第1章 ペーター・エゲン（1413－51年）の生い立ちと

その人柄の変化

(1) エゲン家について

(2) 若きペーター・エゲンの人柄と市長職への就任

(3) 市長職を重荷と感じ始める若きペーターの苦悩

- (4) 国王フリードリヒ3世との出会いと
変わるペーターの性格

第2章 ペーターの「市民権の返上」事件と ツンフト親方層・市参事会の反応

- (1) 個人の権利を追求するペーターと
彼の奇策「市民権の返上」
- (2) ツンフト親方たちの困惑と慰留願い
- (3) 市参事会員たちの猜疑心とペーターの本心
- (4) ペーターの狙い——自由〔特権〕証書の獲得とその内容
- (5) 市参事会の対応についてのチンクの見解

〈以上、本号〉

〈以下、次号〉

第3章 都市共同体の秩序と「個人」の自由との軋轢「事件」

〔A〕子どもたちの「結婚」をめぐる有力家の対立 ——ペーターへの反撃の始まり

- (1) アウクスブルク市での
『ロメオとジュリエット』問題の発生
- (2) 「恋愛結婚」をめぐる両家の対応
- (3) 裁判での誹謗中傷に傷つくペーター

〔B〕有力市民にとっての市長職の実態と市参事会の関係

- (1) あらぬ疑惑に立腹するペーターと
再度の「市民権の返上」宣言
- (2) 政務多忙なわりに実入りの少ない市長職への
不満と批判
- (3) 市長在職中の刑の執行回避要請を無視され、
都市から退去

第4章 市参事会の侮蔑的な要求と新たな法廷闘争

〔A〕騎士団員となったペーターとアウクスブルク市との 対立の再燃

(1) 聖ゲオルク騎士団に入会したペーターと
ギンツブルク会談

(2) ミンデルハイム仲裁交渉 (1451 年 11 月 29 日)

〔B〕 調停案を台無しにした「言葉 (ガスト: Gast)」と法廷闘争

(1) ガストとして公的宿屋への強要とメンツの問題

(2) ペーターによる辺境伯のラント裁判所への告訴

(3) アウクスブルク市による宮廷裁判所への上訴と
ペーターの死亡

〔C〕 ペーターの死後も続いた裁判の経過とチンクの感慨

(1) 同裁判を引き継いだ遺族たちとラント裁判所の判定

(2) 訴訟合戦についてのチンクの感慨

注記

索引

〈タイトルは暫定訳〉

(注記) ①訳文の〔 〕内の日本語は、理解を容易にするために訳者が補充したものであり、
() 内は原語である。

②各章内の小見出しも、同様な趣旨から訳者が書き加えたものである。

③当該テキスト [「ブルッカルト・チンクの年代記 (*Chronik des Burkard Zink, 1368-1468*) の第4巻 (Das Buch IV, 1416-1468)」、196-207 ページ。「かつて、ペーター・エゲンと呼ばれたペーター・フォン・アルゴンについて」] で断片的にしか記されていない内容で、他巻や付録に詳論されている場合には、上記の趣旨から【補遺○】を書き加えた。

④テキストの(注)は一括して末尾に、各章ごとにまとめて記した。

⑤索引(人名、事項そして地名・国名)を注記の後に、独立した形式で付記し、掲載分冊番号とページ数を記した。

I. はじめに

——ペーター・エゲン事件について

(1) その意義について

——パクトビルガートウム (Paktbürgertum) との係わりで

ブルッカルト・チンクが著し、F・フレンズドルフ (1866 年) が編纂したアウクスブルク市に関する『年代記 (1368 - 1468)』(DStChr.V.) は⁽¹⁾、

確かに読んでみると、「これまで良く知られていたにも拘らず、十分に利用されているとはいいいがたい」(阿部謹也『一橋論叢(1982年、87-4)』)状態に置かれていた史料であることに気がつく。たとえば、本稿で取り上げたペーター・エゲン事件(第4巻:196-207ページ)に含まれる問題もその一つであろう。それは、これまで長い研究史を有する都市史でもほとんど取り上げられることのなかった「市民からの自主的な市民権の放棄」の問題である。「市民権」をめぐることは、これまでもっぱら「市民権の取得」の問題が取り上げられ、これと真逆の「市民権の放棄」の問題は、初めて取り上げたF・フレンズドルフ(1866年)以降は、C・カレッセ(2001年)⁽²⁾が都市の財政問題との関連で取り上げているだけであった。

この事件で主役を演ずるペーター・エゲンは立派な都市門閥(Junkherr)の身分を継承し、礼儀正しい、品行方正な人物に成長し、貧しき者たちに対しても優しく、それ故に慕われていた。そのため、彼はまもなく市参事会(ラート:Rat)入りが許され、やがて弱冠24/25歳(1436/37年)で市長(Bürgermeister)に抜擢された。その後も市長職に就任し、1444年にはニュルンベルク帝国会議にアウクスブルク市の代表として参加した。そのため在外交官たちの間にも彼の名が広まり、第1次チューリヒ戦争(1440-46年)のリンダウ仲裁会議では仲裁裁判官を要請(1446年)された程であった。さらには国王フリードリヒ3世(Friedrich von Österreich、在位期間:1440-93年)に同行してニュルンベルク市やアーヘン市(Auch:Aachen)(戴冠式への参加)に赴くなど、公務活動に大半の時間をとられて自らの商業活動に専念できず、公務活動が重荷とさえ感ずるようになっていった。このような激務を極める公務への苦悩・不満を抱き始めた頃に、国王フリードリヒ3世と出会い、ペーターの人は都市共同体よりも、自己中心的な「領主(騎士)」の思考へと変質していった。

国王との出会いを伏線として、1442年頃からアウクスブルク市内では「ペーターはどんな政治権力を掌握しても、それでは満足せず、更なる政治権力と自由〔特権〕を得ようと欲している」⁽³⁾との噂が囁かれた。まさにこれを機に、彼は密かに考えていた「市民権の返上」という挙にて

た。それは、すなわち、彼は馬でウルム（Ulm）市に赴き、その後同市から一通の書状をアウクスブルクの市参事会へ送付したのである。これが、すなわち「ペーターの市民権の返上」事件（1444年）の発端であった。この「奇策」に対して、まず、ツンフト親方層は「あのような友誼に厚いお方を失ってよいのであろうか」と困惑し、彼の帰還を懇願した⁽⁴⁾。これに対して市参事会員たちはペーターに不信感を持ちながらも協議し、直ちに名誉ある使者を派遣して、不満があるなら都市裁判所に訴えるなどして怒りを収め、アウクスブルク市に帰還するように要請した⁽⁵⁾。ペーターが使者と共にアウクスブルク市に帰還した時、ツンフトの親方たちは全員が喜んで出迎えた。しかし、市参事会員たちはペーターが求める独自の優越性をめぐって不信感を抱いていることを作者たるチンクは喝破していた。その後の協議で、市参事会側は「市長の公務の多忙さに見合う収入およびその不足分の給付をめぐって改正に前向き」⁽⁶⁾であったのに対して、ペーターは「自分は汝らとは異なる、そして〔ラートとの協議で定められた〕^{バクト}契約課税（mit ainen geding）を納付する特別な^{バクトビルガー}契約課税^{トウーム}市民（das Paktbürgertum）でありたい。この約束ができぬのであれば、アウクスブルク市を退去する」との強圧的な態度であった⁽⁷⁾。

ところで、ペーターが要求した「契約課税を納付する特別な市民（権）」⁽⁸⁾とは、ラートがかつて特典として認めた低額納税の権利や自由な移動権などを有する新市民のことである。しかし、この事件は、ペーターのように新市民でなく、アウクスブルク市に古くから在住していた有力家系でも「市民権の返上」という奇策を弄すれば、この特典にありつけるといふ道筋をつけたと言えよう。確かに、このような行動は彼らの本来の納税額が低減されるため、本人たちにとっては、自己資産の実質的な増収を意味する。しかし、都市の収益にとっては大幅な減収を意味した。ラートはペーターの奇策たる「市民権の返上」に対して、穏便な3倍の追加税（drei Nachsteuer）の納付義務を条件に、お構いなしで処理するしかなかった。ペーターのような有力担税者を失えば、都市の財政的痛手も大きいと判断し、それ故に厳罰で対処することはできなかったのであろう。

もちろん、このような富裕な家系に付け込まれる原因は、アウクスブルク市では14世紀後半以降（具体的には、1368年のツunft蜂起で同市の都市門閥〔パトリツィアート（Patriziat）〕や商人たちが同市を見捨て、逃走したため発生した都市財政の危機⁽⁹⁾）に対する克服手段として、ラート自らが標準的な新市民にまで拡大させた時点）にまで遡る。これによって課税の公平性は崩れ、他の市民たちからは恨みを買うことになった。そのため初期の制度では特典期間の10年後に標準的な税額の査定に戻っていたのであった。この契約課税による市民の受け入れ制度は、帝国都市が政治力を失い、多額の負債を抱え込む1389年のシュワーベン都市同盟の敗北で一旦、中断する⁽¹⁰⁾。

このペーター・エゲン事件は、上記の「契約課税市民権」から派生する恩恵「低額納税」を獲得するために、一時的な「市民権の返上（放棄）」という奇策による「抜け道」の存在を知らしめた。と同時に、アウクスブルク市参事会には「契約課税市民権」がいかに危険なものであるかを認識させるものであった。

しかし、この事件以降も「市民権の返上（放棄）」による「契約課税市民権」への脱法行為は続き、やがてアウクスブルク市の住民たちも同市の指導的な有力家系への特典を不快で唾棄すべき行為とみなし、1470年代には同市の経済的に恵まれない住民たちの不満や怒りがピークに達する。折しも、アウクスブルク市では、ツunft出身のウルリヒ・シュヴァルツ（Ulrich Schwarz）が市長となり、彼はこの恵まれない住民たちの「声」を背景に「寡頭支配体制」の市政改革（都市門閥への課税）に乗り出すのであった⁽¹¹⁾。

（2）史料から見えるチンクとペーター・エゲンの関係

チンクは1396年にメミンゲン市で生まれ、18歳頃まで勉学に打ち込み、23歳〔1419年〕にアウクスブルク市のツunft政府の参事会員（職布工ツunft出身）のジョス・クラーマーが経営する商会に入社した⁽¹²⁾。しかし、その社主が死亡する1430年頃に退社。その頃に都市門閥ペーター・エゲ

ンから秤量官として好条件でヘッドハンティングされ、7年間（1431 - 1438年）同職に留まったのである⁽¹³⁾。

Ⅱ. テキストの邦訳

以下は、ブルッカルト・チンクの『年代記 1368 - 1468 年』の第4巻：「かつて、ペーター・エゲン（Peter Egen）と呼ばれたペーター・フォン・アルゴン（Peter von Argon）について」⁽¹⁾ についての邦訳である。

第1章 ペーター・エゲン〔1413 - 51 年〕の生い立ちと その人柄の変化

（1） エゲン家（当主であり、ペーターの父親ロレンツ）について

アウクスブルク市に一人の市民（Bürger）がいた。彼はロレンツ・エゲン（Lorentz Egen）〔1360/70 - 1418 年〕と呼ばれ、アウクスブルク市では富裕層に属し、政治力のある人物（ein reicher gewaltig Man）であった⁽²⁾。

【補遺1】 同ロレンツは商人ツunft出身者で、1396年に市長に初めて就任した後も、〔1401、04、07、09、11、そして15年の各年に〕市長職に就任していた。また1416年には都市の出納長（Baumeister）に就任していた。さらに彼は1399年と1410年に都市の名代としてアウクスブルク司教（Burkhard von Ellerbach および Eberhard (II) Graf von Kirchberg）とアイヌング〔合意（Einung）〕を締結した市民の一人であった⁽³⁾。

【補遺2】 ロレンツは2度結婚している。彼の初婚の妻は、1394年にアウクスブルク市の最も裕福なダクス家（Dachs）の——〈ダクス未亡人が1396年に納入した財産税は360½フローリン金貨（fl.）で、この年の長者番付の1位を占めた。その財産額は2万1,630fl.であった⁽⁴⁾〉——娘マルガレータ（Margaretha）であった。ロレンツは妻の母親の巨額な遺産分割〔の一部を相続した〕ため、ロレンツの財産評価額は4410fl.（1396年、10位）から1万2,570fl.（1399年、1位）に増加した。

その妻が子どもに恵まれずに死亡した1410年に、彼は妻方の姉妹たちの遺産要求を排除するために、私設の聖アントン (St. Anton) 施療院と礼拝堂を建設した。その建設費用におそらく7,000fl.⁽⁵⁾を費やした。

彼は〔ワイン市場近くの〕自分の屋敷の裏側に聖アントンに敬意を払うべく聖アントンという施療院 (ein spital) を〔1410年に〕建設した。その場所は、今日のヴィンター小路 (Wintergasse) の上手に位置する。〔やがて1445年に〕この施療院はさらに増築され、かつ充実した施設となり、そして賞賛に値すると評価されるようになる。この施設には12人の〔貧しい、ないし年老いた〕人々〔助修士 (Bürder)〕が生涯にわたって (ewiglich) 扶養されることになっている。彼らにはあらゆる必需品が、しかも十分な量、与えられる。さらに1人の司祭 (priester) も〔施設に〕留まるようになる。この司祭は上記の人々に聖歌と〔聖書を〕読み聞かせ、また宗教的に必要なあらゆるものを用意する義務を負った。また、同司祭へもあらゆる必要なものが、同様に〔具体的に、年収40fl.が〕与えられていた。このことはおそらくアウクスブルク市のすべての住民たちには知れわたり、周知の事実となっていた。

(2) 若きペーター・エゲンの人柄 (協調性と温和な性格) と 市長職への就任

上記のロレンツ・エゲンが〔1418年1月7日に〕⁽⁶⁾死亡した時、彼には〔ニュルンベルク市出身の再婚妻ドロテア・ヴァルトシュトローマー (Dorothea Waldstromer) との間に1413年頃に儲けた〕ペーター・エゲンという一人息子がいた。この時、この子はまだ4/5歳の幼児〔1417/18年 (ein knab bei 4 oder 5 jahren)〕であった。

この幼児が成長して18歳の若者 (ein Jüngling bei 18 Jahren) になった時〔1431年〕には、ペーターは立派な〔門閥〕貴族 (Junkherr) 〔という身分〕を継承し、礼儀正しい (zuchtig)、また品行方正な (gute sitten) 人物となっていた。彼にはアウクスブルク市内に立派な、そして名高い親族 (fre-

unde) が多数いた。ところで、これらの親族たちはペーターを非常に高潔で、そして礼儀正しい人物とみなし、彼にゲヴェールリヒン (Gewärlichin) と呼ばれる裕福な寡婦の娘エリザベート (Elisabet) を紹介し、彼女とめあわせた。

【補遺 3】 ペーターとエリザベートとの結婚式は1431年〔彼が18/19歳〕に挙げられた。アウクスブルク市の1431年度の『出納帳簿 (Baurechnungen)』によると、「アウクスブルク市で举行された彼らの結婚式に参加した招待客 (Gast) へ振舞ったワイン (Schenkwein) の代金はデナール貨で11ポンドであった」⁽⁷⁾。

彼は急を要する (elig) 時でも、極めて躰の行き届いた (gezogenlich)、しかも謙虚に公序良俗を遵守して過ごしていた。それ故に、彼はアウクスブルク市内で人々に好かれていた。彼は有能で (grad)、感じの良い (hüpsch) そして品行方正な (tugenthaft) 人物であり、また貧しき者たちに対しても非常に友好的〔親切〕であった。このために、彼は貧民のみならず富者をも含むすべての住民たちから賞賛され、そして慕われていた。そのため、彼はまもなく市参事会入りが許され、そして名誉、聡明さ、財産⁽⁸⁾そして身体〔などのすべての条件〕でも申し分なかったので、〔市参事会員に〕選出され、やがて1437年〔弱冠24/25歳にして〕市長に任命された。彼と共にシュテファン・ハンゲノール (Steffan Hangenor) も市長職を務めた。

シュテファンもアウクスブルク市に居住していた時は、確かに立派な、聡明で、容貌も端整な人物であった。ペーターは前述したように〔市長として〕、日々〔都市内外の〕あらゆる案件を処理していた。それ故に、アウクスブルク市には、彼以上の政治力を備えた〔当時最も影響力のある〕人物などはいなかった。

【補遺 4】 1436年6月26日の証書 (M.Boica.XXIII. p. 413) の中では、ペーターとシュテファンは暫定的な市長と言及されている。しかし、F・フレンズドルフはこの証書の内容を他の史料では確認できない。むしろ、『書簡〔控え〕帳簿 (Briefbucher)』や『出納帳簿』では、ペ

ーター・エゲン2世 (Peter Jung Egen) なる人物が1437年に初めて、しかも都市貴族 (herren) 出身のコンラート・フェーゲリン (Konrad Vögelin) と共に市長として登場している、と言及している⁽⁹⁾。

(3) 市長職を重荷と感じ始める若きペーターの苦悩

【補遺5】 この点については、チンクの記載はなく、チンクの情報源に限界がある、と、F・フレンズドルフは指摘している。

ペーターは弱冠24歳〔1437年〕で初めて市長職に就任した後も、1439、42、44、47そして50年にも就任していた⁽¹⁰⁾。

彼は、このような長期⁽¹¹⁾にわたる都市役職〔市長職〕に就任した結果、スイス盟約者団とチューリヒとの戦争をめぐるニュルンベルク帝国議会 (1444年) にアウクスブルク市の代表として参加する羽目になる。そのためか、彼の名は在外外交官たちに広まり、第1次チューリヒ戦争 (1440 - 46年) の調停役を要請される〔1446年〕⁽¹²⁾。また、国王フリードリヒ3世に同行してニュルンベルク市 (1442年：アウクスブルク市を去る際のお供役) やアーヘン市 (1442年：フリードリヒ3世の戴冠式へ参加すべく) へ旅行する〔7月22日から、13週間と6日の旅〕など、公務活動に時間をとられ、自らの商業活動に専念できず、重荷と感じるに至る。そしてこのことが彼の不満の一因となったに違いない。このため、彼はやがてアウクスブルク市 (レート) と対立することになる⁽¹³⁾。

(4) 国王フリードリヒ3世との出会いと変わるペーターの性格

1442年〔結婚して11年目：29/30歳〕のある日のこと、ペーターは意を決して、彼の父親から受け継ぎ、〔市井の人からも〕そう呼ばれてきたエゲン〔なる家名〕を変えた。そして彼はもうその家名では呼ばれたくないと、自らを〔貴族風の〕ペーター・フォン・アルゴン (Peter von Argon) と改名した。

【補遺6】 1442年、国王フリードリヒ3世がアウクスブルク市を訪問

した際、国王はペーターの屋敷に宿泊した。この時、ペーターは国王の許可を得て、これまでのペーター・エゲンなる名前を改め、貴族風のペーター・フォン・アルゴンと名乗り出した⁽¹⁴⁾。

【補遺 7】1442年、国王フリードリヒ3世はペーターを貴族身分に取り立て、そして彼に新しい家紋と「フォン・アルゴン」なる家名を授与した⁽¹⁵⁾。

彼のこのような〔改名した〕名前を、私ことブルッカルト・チンクはいかなる帳簿でも見出せない。しかし、彼がかなり以前〔すなわち、ドイツ国王ジギスムント（Sigmund: Sigismund）が彼の屋敷に宿泊した1431年頃〕⁽¹⁶⁾から改名を考えていた〔のではないか〕と思われる。彼は改名と同時に、父から受け継いだ伝来の家の紋章（wappen）をも変えてしまった。従来のエゲン家の紋章は白地に雌鹿（hindinfuess）をあしらったものであった。エゲン家を興した時点では、その紋章はすてきで、上品なものであった。しかし、ペーターが従来の雌鹿の絵柄に代わって採用した紋章は、黒と黄の2色のストライプ〔縞〕模様である。この紋章も古い〔由緒ある〕教会の中の至る所で、またペーターの屋敷の周辺でも見られるが、確かに美しい紋章である。

ハプスブルク家出身の国王フリードリヒ3世がペーターに頼んで、同国王がここアウクスブルク市を訪れた時は必ずと言っていいくらい彼の屋敷⁽¹⁷⁾に宿泊していた。そして〔1442年4月の今回の訪問⁽¹⁸⁾は〕アーヘン市へ騎行して、〔同年の6月17日に〕同地で戴冠する行程の途中で、アウクスブルク市に〔同年の4月20～25日まで〕立ち寄ったのである。——〈アーヘン市までの行程は、フランクフルト市から船でライン河を下り、ボン市で上陸。そして騎乗して「戴冠街道」をデューレン市経由でアーヘン市に至るものであった⁽¹⁹⁾。〉——そして、知らせておかねばならないことは、至る所にあったエゲン家の従来の古い紋章を捨てさせ、それに代わって新しい紋章を同都市の至る所に据え付けさせたのは、〔誰だろう〕教会内の多くの方隅に掛けられていたエゲン家の〔古びた〕紋章を見た同国王〔ご自身〕であった点である。

第2章 ペーターの「市民権の返上」事件と ツンフト親方層・市参事会の反応

(1) 個人の権利を追求するペーターと彼の奇策「市民権の返上」

ところで、汝ら〔市参事会員 (ihr)〕が〔今や、国王の後ろ盾を得た〕上記の市民ペーターがたとえどんなに裕富であろうとも、またどんなに政治権力を掌握したとしても、彼は決してそれで満足せず、さらなる政治権力と自由〔特権〕(je mehr gewalts und freiheit) の獲得を欲しているということ〔風説〕を耳にした〔1444年の年末〕⁽¹⁾ 頃に、彼はとうとう意を決し〔その実現のために〕内密な方法 (haimlicher art) を駆使して〔市民権の返上という奇〕策を考えついた。それは、すなわち、彼が馬に乗って〔一旦〕アウクスブルク市を発ってウルム市に赴き、そしてそこから一通の書状をアウクスブルク市の市参事会へ送付する、という方法であった。

そして、〔その書状の内容たるや〕「自分はもはやアウクスブルク市の市民として同市に留まりたくないので、この書状をもって、市民権 (Bürgerrecht) を返上する」というものであった。

(2) ツンフト親方たちの困惑と慰留願い

この書状がアウクスブルク市参事会で読み上げられた時、ツンフトの親方たち (zunftmeister) の幾人かは我が耳を疑い、そして「自分たちはあのような友誼に厚いお方〔ペーター (ein solchen freuntlichen man)〕を失ってよいのであろうか」と自問したほどであった。このペーターの行為 (das) は彼らには大きな問題 (ain gross ding) であった。——〈この時点で、〔商人ツンフト出身者たる〕ペーターとツンフトの親方たちとの関係は極めて良好であったので、ツンフトの親方たちは彼に全幅の信頼を寄せていた (sie im all willig waren)。〔逆に〕ペーターは彼が親方たちに何を求めようとも、彼らは喜んで応じることを知っていた。〉——そして、市参事会は協議して、直ちにウルム市に名誉ある使者 (erber potshaft) を派遣し、そして「ペーター殿はそれ〔自分の不満〕を都市裁判所に訴えるなどして

怒りを静め、アウクスブルク市に帰還するように」強く要請した。アウクスブルクの住民たちは——〈富める者も貧しき者も〉——〔彼が帰還するためならば〕これまで以上に進んで、ペーターが喜ぶようなことを行なおうとした。また彼らはペーターにアウクスブルク市までの身の安全と護衛 (frid und gelait) を約束し、そして改めてその保証まで与えた。ペーターが使者と共に馬に乗ってアウクスブルク市に帰還した時〔1445年〕⁽²⁾、ツンフトの親方たちは全員喜ん〔で、ペーターを出迎えた程であっ〕た。

(3) 市参事会員たちの猜疑心とペーターの本心

私ことブルッカルト・チンクは、その当時〔アウクスブルク市の住人全員がペーターの帰還を心から歓迎していたわけではなく、とくに〕市参事会の顧問たち (Ratgeber) は全員が依然として、ペーターが求めている独自の利益をめぐって (umb solch aigen Vortail)、彼に不信感を抱いている (im nit als gar hold waren) と確信した。〔それは〕ペーターが、ツンフトの親方たちや市参事会側の慰留に応じて、アウクスブルク市に帰還した時〔1445年〕⁽³⁾、市参事会の全員は彼に「抵抗心」(aufstehen gen im) を示すべく、あたかもペーターが約束の国〔カナン〕の地 (über mör) :『創世記』12-7) から来たかのように⁽⁴⁾ 彼を〔市参事会に〕受け入れたからであった。

そして、顧問たちはペーターを座らせ、そしてすでに彼が市参事会に訴えていた「彼の〔市長の職務の多忙さに比べて〕見合わない〔収入の〕ことや〔その不足を〕彼に補填することなどをめぐり彼と話し合った。その結果、人々は彼の意向を汲んで、すべてを改めようと思ったのであった。そして〔少し大袈裟かと思われるのだが〕、アウクスブルク市内で〔ペーターの意に沿わない行為を〕行なった者は誰であれ、必要に応じてペーターに償わなければならない、と〔大きく譲歩したのであった〕。しかし、人々が〔個人的に〕彼をしばしば説得しようが、はたまた市参事会がいかに彼と友好的な雰囲気の中で語り合おうとも、それらはすべて徒労に終わった。

彼が語るには、「自分は汝らアウクスブルクの市民として——〈たとえば以前のような市民としてであれ、はたまた他の形態の都市住民〔寄留民？

(ander Bürger)〕としてであれ)——、同市に留まることに未練などまったくない。ただ、自分は汝らとは異なる、そして契約課税という特権を備えた (mit unterschied und mit einem geding) [契約課税市民 (Paktbürger)]⁽⁵⁾ でありたいのである。もしそうでなければ、自分はもはやアウクスブルク市に留まる気持などさらさらないし、また自分の約束をも反故にしたい (wolt wider an seinen gewarhait)」、と。つまり、人々が彼に語ったように、彼らは「彼を引き留めるために」彼が気に入ると思われることを実行しようとしたのであり、さらには彼が求めることをも実行しようとしたのである。ツンフトも彼に忠誠を尽くすことを、ペーターは十分に熟知していた (das west er wol)。〔案の定〕ツンフトは進んで彼に仕え、このようなツンフトの行為をペーターは喜んだ。すなわち、ツンフトは彼が求めたことをすべて〔実行する旨〕約束したのである。

こうして、彼は「従来よりも低額の課税を負う契約課税市民として」再びアウクスブルク市に滞在し、やがて以前と同じように彼のすべての所領 (Herrschaft) を支配下に置いたのである。その後、彼が同市に長く滞在すればする程、彼は「政治力を発揮して」ますます権力志向の「強い」人物になっていった。彼が望むことは「必ずと言っていいくらい」実行されたのであった。

(4) ペーターの狙い——自由〔特権〕証書の獲得とその内容

ところで、ペーターは再び、自分のすべての所領、権力 (Gewalt) そしてその他の利益 (Nutz) と財産 (Gewere : Besitz) を所有した今では、〔景気などが〕何もかも悪化したとしても、自分は利益や土地財産 (gut) など何であれ、〔それらの収益は〕さらに増加するであろうと踏んでいた〔ようである〕。このような時でも、ペーターは内々に彼に交付される〔予定の〕アウクスブルク市の印章の付いた1通の自由〔特権〕証書 (Freibrief) を入手するまでは、そのために如何に時間がかかろうとも、ツンフトの親方たちや市参事会の若干の顧問たちとの友誼関係の維持に努めていた。

〔ところで〕その自由証書の内容は〔以下の4点に要約された。具体的には〕

第1点は、すなわち、ペーターは、彼が希望すれば短期であれ長期であれ、しかも一切妨害されることも煩わされることもなく、生命、そして財産を持参して (mit leib und gut)、アウクスブルク市から何処なりとも——〈[たとえば] 領邦都市〔諸侯の都市 (herren stadt)〕や〔他の〕帝国都市 (Reichstett) へさえも〉——、立ち去ることができる〔すなわち、自由な移動権の付与〕。

第2点は、彼がアウクスブルク市から立ち去ったとして、自分の意志で、また自分に緊急事態が生じた場合には、彼は馬であれ乗り物であれ、それらに乗って、また徒歩でアウクスブルク市に戻ることができるし、また彼の所領に舞い戻ることができる。この件で、誰であれ、何らかの方法や手段を用いて、ペーターの帰還を妨害してはいけない。ただし、〔その場合〕ペーターはこの件に関する慣習〔アウクスブルク市 (1374年3月11日) の規定 (Sitte u. Gewoheit)〕⁽⁶⁾ に従って、3倍の追加税 (drei nachsteuer) を納付する義務を負わねばならない。〔ところで〕この3倍の追加税は、その者がアウクスブルク市から立ち去ろうとする場合や市民権を放棄〔返上〕する場合には、直近3年間に納税金として (in drei jaren erst vergangen zu steuer) 納付した総金額よりもはるかに高額である〔アウクスブルク市 (1444年2月17日) の規定〕⁽⁷⁾ 〔すなわち、帰還への安全通行の保証と3倍の追加税の納付義務〕。

第3点は、同証書〔の別な条項〕には、もし、その者が〔立ち去る場合に〕自分の財産を——家屋であれ、その他の財産であれ——売却したくない場合、人は (man) 彼に〔財産の売却処分を〕強要してはいけないし (dringen)、また無理強いしてもいけない (nönnen)。また人は彼にその件で売却処分すべしという〔裁判所の〕判決を下すように圧力をかけてもいけない。その代わりに、その者は他の寄留者 (gest : Gast) が行なっていたように2倍の納税額 (zwisacher steuer) を納める義務を負わねばならない。またその者は、いかなる方法や手段を用いようとも、また商売 (handel) をしていないからといって、その2倍の納税額の支払い (das) が免除されることはない〔都市から退去の際、都市内に所有する財産の保全とその強制売却が

らの免除の保証、居留民として2倍の税額の納税義務)。

第4点は、自由〔特権〕証書の中に含まれているその他の多数の恵まれた条項 (vil ander gut articul) 〔の内容〕もペーターに極めて有利な内容であった〔アウクスブルク市 (1445年1月12日) の規定〕⁽⁸⁾。

(5) 市参事会の対応についてのチンクの見解

確かに、ペーターに自由〔特権〕証書を与えたアウクスブルク市参事会の顧問たち (Ratgeber) は、ペーターと親しい友人 (freund) であったし、そしてペーターに、その後は、都市〔参事会〕そのものにも、多くの物品〔贈与品〕を進んで与えていた (gunt : gonnen) 連中である。このような行為は、アウクスブルク市の中でも、また彼が手に入れた自由〔特権〕証書の中でも、十二分に〔変だと〕気づくべきことである。

嗚呼！汝ら、〔何と〕不誠実な〔アウクスブルク市の〕人々よ (untreue Welt)！

〔この当時〕私ことブルッカルト・チンクは確かに市参事会の中に居わせていた。世間の人々 (man) は確かに同自由〔特権〕証書について〔あれこれと〕噂していた。〔しかし〕ペーターに自由〔特権〕証書を与えた〔中心的な〕人物が誰なのかを、誰もが——〈その人物 (in) を知っていたにもかかわらず〉——〔何故か、〕明らかにせず、〔うやむやのままに〕していたのであった。〔しかし、実際に〕自由〔特権〕証書がペーターに付与されたのであるから、ペーターに同証書やその他の財産〔払い下げ〕を確実に認可した (vergonnen) 市参事会員がいたのは確かであろう。

〔実際に、以下のような事態〕 (das) が起こっていた。すなわち、ペーターは今や (nun) 再びここアウクスブルク市に留まり、そして彼のすべての所領、〔政治〕権力そして名誉 (herrschaft, gewalt und eher) を、かつて〔市民として〕保持していたように、手に入れたのであった。

〈以下、次号へ続く〉